



元海将補・防衛大学校教授

平間 洋一
Hirama Yoichi



角川ソフィア文庫、2015年8月
880円（税別）
ISBN978-4-04-409233-8

本書の視点と狙い

二〇〇〇年にPHP研究所より同名の『日英同盟』を出版した当時は、冷戦の最中で脅威の対象は「ソ連」でした。それから一五年が経過し、脅威の対象も国境を越えたイスラム過激派IS（イスラム国）や、軍備を増強し核心的利益と一方的に領土を拡張している中国に変わり

ました。また著者も村山内閣の日英歴史交流事業や、日露戦争一〇〇周年シンポジウムなどに参加し知見を深め、それを基に前書を全面的に書き直しましたのが本書です。

日英同盟が締結されたのは一世紀も前の一九〇二年で、学ぶには古すぎると思われるでしょうが、日英同盟では統帥権問題や戦域制限問題など、現在の憲法、集团的自衛権と同じような世界に通じない日本独特な問題が生起し、日英両国を離反させました。

本書では日英同盟と日米安保を対比しつつ、同盟の選択と国家の盛衰を視座に、同盟政策の利点や欠点、日英同盟の価値と継続の困難さ、日英同盟の変質に対する日英の対応を考究しました。特にポピュリズムに迎合し同盟国の英国を敵とし、大東亜戦争に突入してしまった過程や、当時の政治指導者や扇動するジャーナリズムの問題など、日英同盟と日米安保の間には多くの類似点があります。

また、四カ国条約や中国に関する九カ国条約を、東南アジア連合（ASEAN）

や、拡大アセアン・フォーラム（ARF）など多国間安全保障体制に、大東亜共栄圏を「一带一路」の中国のユーラシア共同体に、ワシントンやロンドン軍縮条約を、核拡散防止条約や国連の平和に関する条約や決議に置き換えてみると、国益で動く国際機関の安全保障に対する限界など学ぶべき多くの遺訓が見出せるのではないだろうか。

本書により日本の安全保障政策に歴史的・戦略的思考が加えられることになるならば、これに過ぎる喜びはありません。私を書いた本を私が評価したのでは自画自賛になりますので、雑誌などに掲載された書評を紹介します。

宮崎正浩

本書で平間氏は、通説を越えて当時の外国メディアの分析にもっとも力を注がれ、日本の判断より、外国がどう見ていたか、最初の高い評価だったのに、後日は中国とドイツの世論工作の前に、国際的評価が失われていく過程が描かれる。歴史を活写するダイナミズムが本書にあ

ふれていて躍動感がある。

日露戦争で日本が勝利できた背景の一つは英国の後方支援である。しかし「日露戦争後、日米関係は友好から対立へ、日露関係は対立から協調へと転換した。日米対立は満州問題と日本の移民問題にあつたが、とくに講和会議を有利にしようとしたウィットや、ロシアの敗北で孤立したドイツが、日英や日米を分断しよう」と黄禍論を展開したこと、アメリカが中国、とくに満州への経済的進出を阻止されたこと、さらに戦後に経済の低迷から多数の移民がアメリカ西海岸に急速の増加したことから加速した」。つまりこれらの歴史的過程はそのまま日米戦争への布石である。一九一一年七月の第二次改訂ではロシアという共通の敵が消滅し、日露協約、日仏協約、英露協商の締結、アメリカや自治領カナダ、オーストラリアの人種問題をめぐる対立もあり、日英同盟は存続の危機を迎えていた。つまり第二次改訂は英国有利な片務的内容に変質し、同盟関係の解消は時間の問題となっていた。この間、コミンテルンが

成立し中国は日英同盟の離間工作を開始した。そして、「日本が南洋群島を占領し、オーストラリアに対日警戒論が強まると、ドイツはこの変化を日英分断、英豪の連携弱화에利用した」。そして米国の対日外交が劇的に敵対化へ向かったのだ。

近衛文麿は「英米人がいう平和とは、自己に都合のよい現状維持のことであり、正義とか人道に関係なく、それに『人道主義』という美名を冠したものに過ぎない」。国際連盟規約は「人類の機会平等の原則」に反しており、国際連盟で最も利益を得るのは英米だけである」と批判した。そして、平間氏は「歴史を正さなければ日本の精神的復興は永遠に出来ない。歴史問題は国家の名誉、尊厳の問題であるだけではなく、国家存続の問題だからである」と。また、平間氏はマッキンダー、マハン、スパイクマン、ケナンの地政学をふまえ、南シナ海から海のシルクロードを構築して世界に覇権をもつめる中国を現代的な世界史のパススペクティブに立脚した地政学にもとづいて、

次のように解析されている。

中央専制的な政治システムや陸軍主導のタイトな戦争指導に服する大陸国の海軍は、柔軟な対応を要求される海上作戦には不適で、悲劇的な敗北に終わることは、ドイツ海軍やフランス、ロシア海軍（ソ連）の歴史が教えているが、『人民解放軍——海軍』と陸軍の人民解放軍の下に置かれ、陸軍指揮官が多い共産党軍事委員会に指揮され、政治将校の監視を受けている中国海軍が、はたして柔軟に運用され、レーダー、近接信管、最後は原爆と次々に新兵器を開発する自由主義諸国の海軍に、外国技術のコピペの武器で対抗し、制海権を確立できるのであるか」と最後に中国軍の実力に大きな疑義を呈されている。

最も参考になったカスターマーレビュー

——投稿者 second-thoughts

平間氏は決して親米とは言えないだろうが、アメリカとの同盟の長所・短所にもわきまえて、チャーチルの指摘を引用しながらアメリカとの付き合い方を提示し、同盟するならアメリカとの見解を提示している。日英同盟については、「国際感覚がなく長期的世界的視野に欠ける日本が、世界的視野から戦略的思考ができるイギリスを同盟国としたため」、曲がりなりにも二十年間、大きく針路を誤らなかつた」と評価する。また、陸軍主導の大陸国の海軍は、柔軟な対応を要求される海上作戦には不適と看破し、外国技術のコピペの武器で対抗する中国海軍の弱点を指摘する辺りも、軍事外交史や地政学的な視点が生きている。宣伝機関に墮した国連の批判あり、ドイツの親中的傾向の指摘もある。さらに、力が正義の国際政治において、戦後日本の平和を守ったのは、日米安保条約であり在日米軍であると断言する。異論もあるが、

戦前日本を単純に賛美している訳でもなく、多様な視点に触れるという意味でも、一読に値する好著である。

日英同盟を通じて、読者にわが国の進路を深く考えさせる名著。

——投稿者 南木隆治

「同盟の選択と国家の盛衰」との副題が付いている通り、かつての日英同盟、そして現在の日米同盟を巡る、ほぼ全ての重要な課題が、余すことなくこの一冊の書物に書き込まれ、その、それぞれの局面が俎上に上げられている。著者自身が誰が悪かったのかと言えば「みんなが悪かった」という史観であると通俗的に述べているのは、実は逆に新しい未来のわが国の史観を切り開きたいと言う、強い意志によってこの著作が貫かれているからである。単に歴史の勉強の為にある著作ではなく、現下のわが国が何をなすべきか、我々がどのような歴史観を持つべきかを読者に考えることを迫る、未来を切り開く重要な著作である。

日英同盟から透けて見える日米安保

— 投稿者 KOM —

元海上自衛官、元防衛大学校教授で太平洋学会理事、軍事史学会顧問、戦略研究学会理事をはじめ数多くの肩書きを持つ平岡氏の著作。日英同盟を結ぶに至った経緯から日英同盟解消、そしてその後の日本について、他国の状況についても詳細に記載されています。

日英同盟は国家体制から思想までもが大陸的専制的となりそうな日本に、自由、権利、議会的民主主義などの海洋文明的価値観をもたらし、日英同盟のおかげで国際感覚がなく長期的視野にかける日本が曲がりなりに二〇年間に渡り国の進路を大きく誤らなかつたと述べています。しかし、第一次大戦中に世界情勢を読み違え、海洋国家イギリスとの同盟を形骸化してしまい、さらに日英同盟解消により日本は起こりうる戦争に備える独自の行動に方向転換したと述べています。日本の過去に照らし海洋国家と連携した時に繁栄の道を歩み、大陸国家と結んだ時に苦難の道を歩んだと述べ、同盟の選択はパワーポリテックスに加え、世界

の情報や世論を支配する国との同盟が望ましいとも述べています。昨今問題となっている日米安保ではありますが、日米安保で海洋国家アメリカと同盟を結んでいたからこそ、どうにかこうにか現代の日本が存在していると感じましたし、また、現代の状況をみても大陸国家（独露支など）と組むということが筋悪だと納得しました。

(ひらま よういち 略歴)

1933年、横須賀市生まれ。防衛大学校1期海上、ESS部、護衛鑑ちとせ艦長、第31護衛隊司令などを歴任し、1988年に退官。防衛大学校教授を経て1999年に退官。法学博士（慶応義塾大学）。著書に『第一次世界大戦と日本海軍』（慶応義塾大学出版会）、編者に『日英交流史1600-2000 軍事』（東京大学出版会）、『日露戦争が変えた世界史』（芙蓉書房出版）、『第二次世界大戦と日独伊三国同盟』『イズムから見た日本の戦争』（錦正社）など多数。軍事史学会顧問、太平洋学会理事、戦略研究学会理事、呉海事歴史科学館運営諮問委員長。